

一般社団法人 大学英語教育学会(JACET)



JACET Kansai Chapter ・ 関西支部 2023 年度支部大会

March 9th (Sat) 2024, 13:30~17:00

@関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

(Kwansei Gakuin University's Nishinomiya Uegahara Campus)

大会テーマ(Conference Theme) :

デジタル時代の英語教員の役割とアイデンティティ：技術革新に適應した英語教育とその役割の再考

The Role and Identity of English Teachers in the Digital Age:
Rethinking English Education and Its Role Adapted to Technological
Innovation

お問い合わせ

E-mail: jacet@zb3.so-net.ne.jp

一般社団法人 大学英語教育学会

Tel: 03-3268-9686

B号館：

B101(576名収容)・・・開閉会式、基調講演会場)

教室外・廊下・・・賛助展示

B102(荷物置き場等)

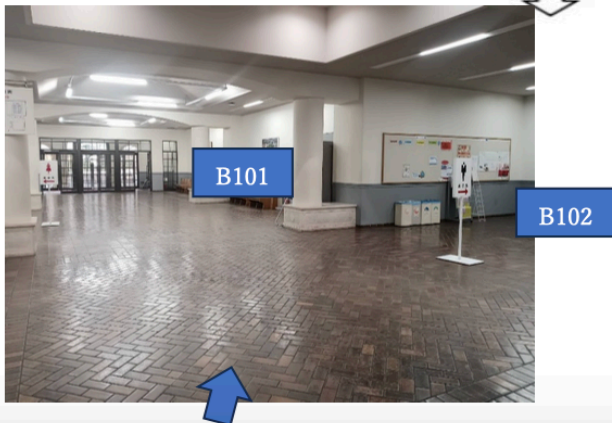
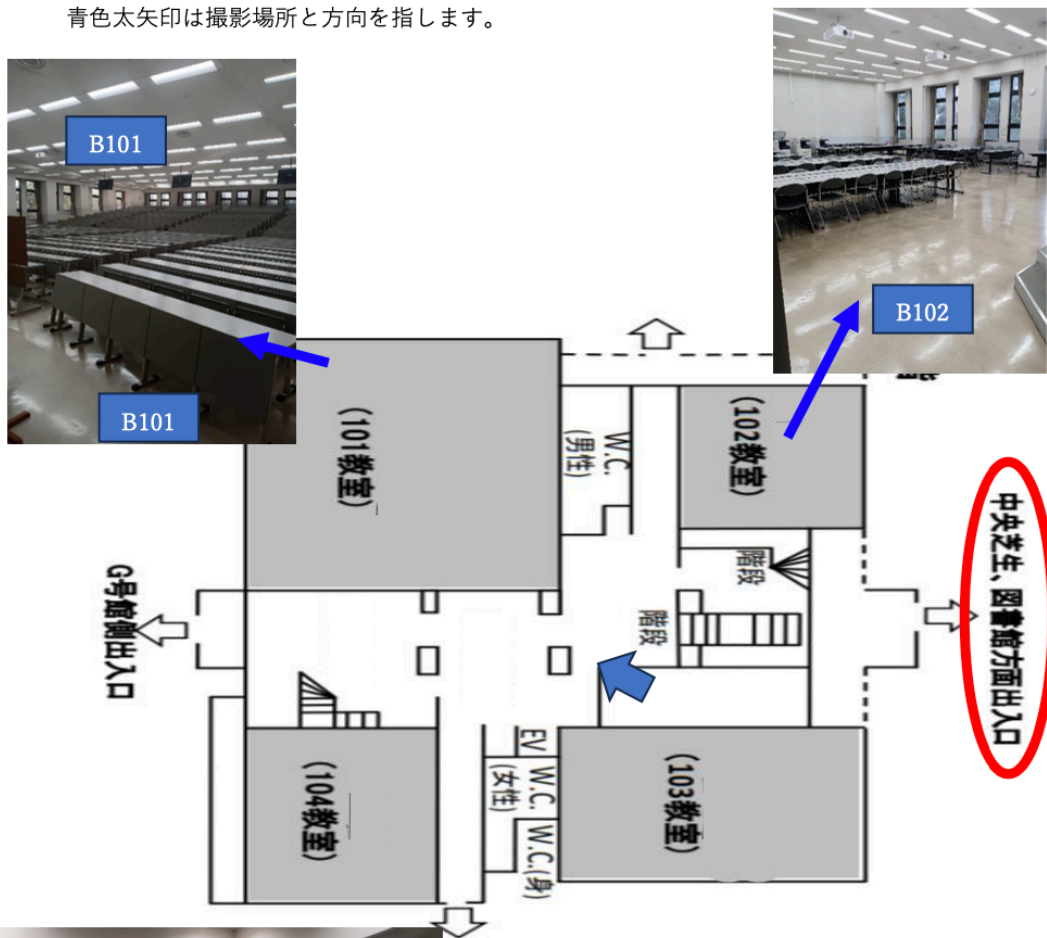
A号館：

101, 103, 104 (研究発表会場、詳細は個別プログラムにて)

[B号館]

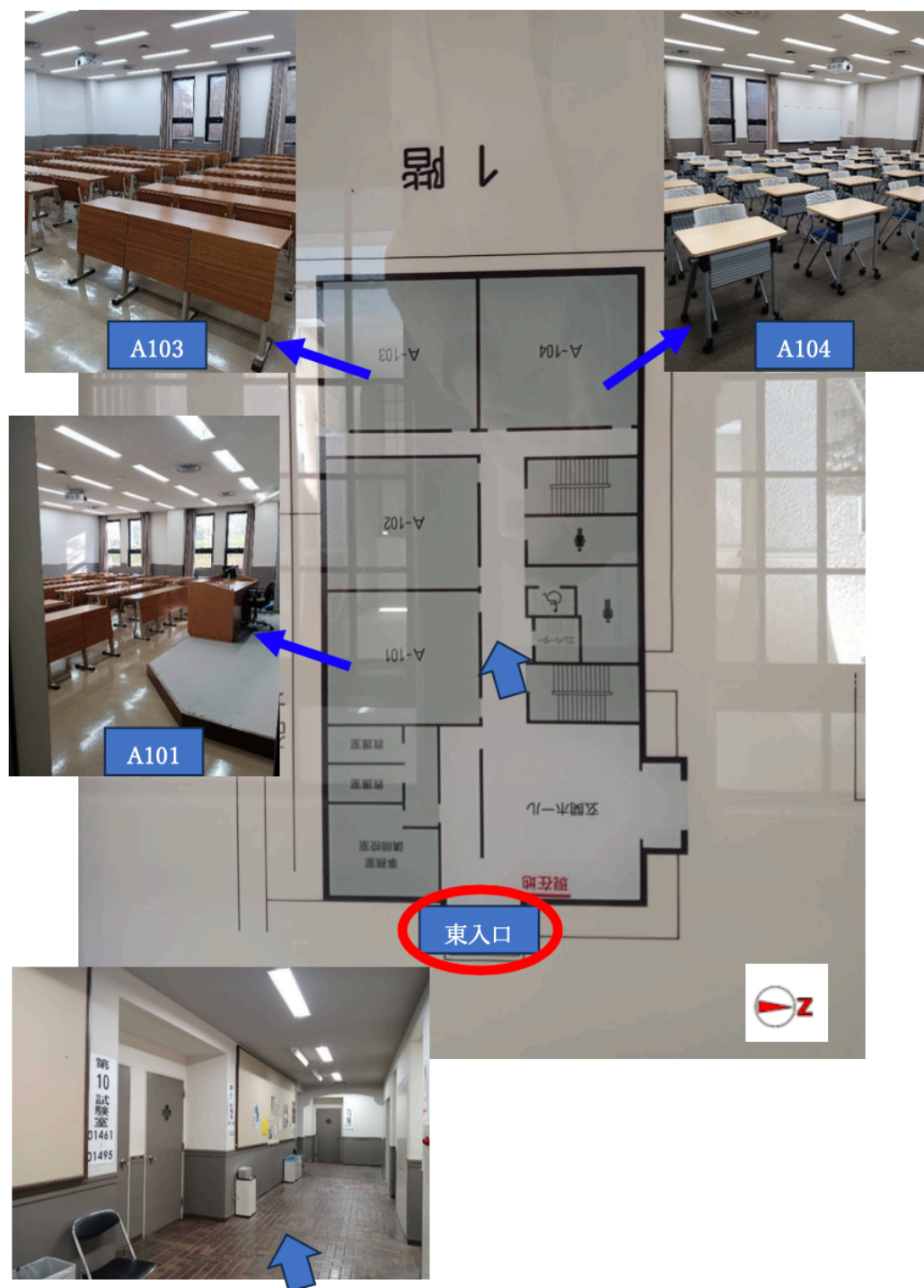
A号館との行き来を考えると、中央芝生、図書館方面出入口からの移動となります。

青色太矢印は撮影場所と方向を指します。



[A号館]

東入口から入って左側に A101, 突き当たり左側が A103, 右側が A104 になります。



JACET 関西支部 2023 年度支部大会

全体プログラム / Program

2024 年 3 月 9 日 (土) / March 9th 2024, Saturday

時間 Time	内容 Events			場所 Room
13:30- 13:45	開会式 Opening Ceremony			B101
13:45- 13:50	休憩 Break			
13:50- 14:15	研究発表 1 / Presentations 1			A101
	板垣 静香 (関西学院大)	RAN, Fan (Osaka Seikei U)	大賀 まゆみ (立命館大) 三木 訓子 (大阪大)	A103 A104
	PBL (問題解決型学習) を取り入れた英語授業の実践報告: 学生からのフィードバックに基づく授業改善の試み	Why Can't We Achieve Learner Autonomy in a Language Class?	動画視聴によるプレゼンテーションの振り返りの実践報告: プロジェクト発信型英語プログラムにおいて	
14:15- 14:20	休憩 Break			
14:20- 15:30	基調講演 / Keynote Speech: 水本 篤 先生 / Prof. Atsushi MIZUMOTO (関西大学 外国語外国語学部・外国語教育学研究科 教授) Professor, Faculty of Foreign Language Studies / Graduate School of Foreign Language Education and Research) 講演テーマ・内容: プロンプトエンジニアリングで変わる英語教育実践と研究 (現在、ChatGPT のような生成型 AI を英語教育に活用する可能性が大きく注目されています。しかし、その活用方法はまだ発展途上です。本講演では、より効果的な英語授業を実現するためのプロンプトエンジニアリング (AI の出力を最適化するための指示法) について、いくつかの事例を挙げ、実際の教室での活用例も紹介いたします。また、研究において生成型 AI を最大限に活用するための効果的なプロンプトエンジニアリングの方法にも言及します。新たな英語教育の時代では、「AI との協働」がキーテーマとなるでしょう。本講演が、その過程で変わることと変わらないことを明確にし、実践と研究の新しい方向性を見出すためのヒントとなれば幸いです。)			B101
15:30- 15:35	休憩 Break			
15:35- 16:00	賛助会員フラッシュトーク Supporting Members Presentation			
16:00- 16:05	休憩 Break			
16:05- 16:30	研究発表 2 / Presentations 2			A101
	井田 浩之 (城西大) 松岡 弥生子 (U of People)	橋崎 諒太郎 (名古屋大院) 関山 博久 (関西学院大学)	KIMURA, Masami (Mukogawa Women's U)	A103 A104
	大学生の抱くビジネスコミュニケーションへの初期概念: 授業デザインへの示唆	シャドーイングの最適な反復回数 の探求: ボトムアップ処理能力とリスニング能力の向上および連語表現の記憶に焦点を当てて	A Study of Current Pronunciation Issues of Japanese English Learners: An Analysis of Questionnaire	
16:30- 16:35	休憩 Break			

16:35-17:00	研究発表 3 / Presentations 3			A101
	松岡 弥生子 (U of People) 井田 浩之 (城西大)	小口 一郎 (大阪大) 三木 訓子 (大阪大) 岡本 清美 (大阪大)	MOSKOWITZ, Nicole (Kwansei Gakuin U)	A103 A104
	オンライン教育再考：日本人英語教師の授業モデルに対する潜在的ピリーフの研究	「人間」へのシフト:5年間の大規模必修 e-learning 授業運営を通して	How do student created videos affect speaking anxiety?	
17:00-17:05	休憩 Break			
17:05-17:20	閉会式 Closing Ceremony			B101

**大学英語教育学会(JACET)
2023年度 関西支部大会**

大会テーマ：
デジタル時代の英語教員の役割とアイデンティティ—技術革新に適応した英語教育とその役割の再考

2024年3月9日 (土)
場所：関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス

基調講演/Keynote Lecture

研究発表
実践報告
賛助会員展示



水本 篤 先生 / Prof. Atsushi MIZUMOTO

関西大学 外国語外国語学部・外国語教育学研究科 教授)
Professor, Faculty of Foreign Language Studies /
Graduate School of Foreign Language Education and Research)

演題:プロンプトエンジニアリングで変わる英語教育実践と研究

JACET Kansai 最新の情報は支部HPにてご確認ください。

大学英語教育学会(JACET)関西支部

研究発表詳細 / Research Presentations

Ref. No.	001
時間 / Time	13:50-14:15
会場 / Venue	A101
発表言語 / Language	日本語
発表者（所属） / Name(s)	板垣 静香（関西学院大学）
発表タイトル / Title	PBL(問題解決型学習)を取り入れた英語授業の実践報告：学生からのフィードバックに基づく授業改善の試み
発表概要 / Abstract	<p>大学における「PBLを取り入れた英語授業」についての実践報告である。英語の授業に、PBL(Problem-Based Learning)「問題解決型学習」を取り入れることにより、現代社会で必要とされる課題解決能力と英語力の両方を向上させることを目標としている。報告では、授業方法、学生の取り組みの様子やプレゼンテーション内容を紹介し、更に、学生を対象としたアンケートの結果を示す。前期授業の様子や7月に実施した中間アンケートから、殆ど全ての学生が授業に満足していることが分かった。多くが積極的にディスカッションに関わり、役割分担も上手く出来ている様子が伺えた。知識の定着を促し、協働学習を通じて思考力と表現力を育成するという、PBLの教育目標に沿った授業を概ね展開することができた。一方で、多くの学生がライティングに困難を感じていたことが分かった。声が小さく、下を向いて原稿を読む等、話し方に問題のあるグループもあった。ライティング、プレゼンテーション準備に、もっと時間が必要だったようだ。また、日本語で話していたグループも多く、今後は英語でのディスカッションを促す必要がある。このように、中間調査として行ったアンケートの結果を基に、後期授業において改善を行っている。前期授業における問題点を、後期授業でどの程度改善できたか、12月に行う最終アンケートによって、検証する予定である。</p>

Ref. No.	002
時間 / Time	13:50-14:15
会場 / Venue	A103
発表言語 / Language	English
発表者（所属） / Name(s)	RAN, Fan (Osaka Seikei U)
発表タイトル / Title	Why Can't We Achieve Learner Autonomy in a Language Class?
発表概要 / Abstract	<p>"Learner autonomy is a familiar term for most language teachers. To realize students' self-regulation and foster their independent learning, teachers and students should change their mindset, objectively observe both sides' performances in a language class, and critically reflect on what a learner-autonomous class means to everyone involved. This article discusses the language teaching and learning background of the illusions and problems that teachers and students have. After the discussion, the essay proposes a broader goal of enlightenment need to set in a learner-autonomous language class. To realize the broader goal, this article introduces two class practices designed based on SLA and mind theories. One of the class practice was carried out in the small-sized (five to eight students in a class) communicative class, aiming at improving students' English speaking ability. The second class practice was the English presentation class, aiming at finding the real meaning of a presentation to each individual student in my language class. The class was a mixture of basic-level students and intermediate-level ones. They were the fourth-grade students. I expected students to creatively provide their definition of a presentation.</p> <p>Course Satisfaction Survey in the end of the semester and the formal and informal talks between teacher and students showed that students reflected on their language performances objectively. Students shifted their attention from the worry about the form to the meaning. Many students liked the class activities and cooperated with me well. However, they still need time to change their mindset. They need a continuous relaxing environment, trying more prompt speaking and presentations to release out their confidence and creation, and experiencing an unconscious flow of information and energy. However, to prove the efficiency of the two class practices, more evidence should be collected in the future."</p>

Ref. No.	003
時間 / Time	13:50-14:15

会場 / Venue	A104
発表言語 / Language	日本語
発表者（所属） / Name(s)	大賀 まゆみ（立命館大）、三木 訓子（大阪大）
発表タイトル / Title	動画視聴によるプレゼンテーションの振り返りの実践報告：プロジェクト発信型英語プログラムにおいて
発表概要 / Abstract	立命館大学生命科学部・薬学部では、必修英語にプロジェクト発信型英語プログラムを導入し、学生はリサーチの成果を英語で発表している。本研究では 2022 年度秋学期の最終授業で、1 年生 61 名が春学期と秋学期の最終発表動画を視聴し、発表の内容・構成・デリバリー・スライドの 4 点について比較し振り返りを行い、前述の 4 項目の改善の有無、その要因、動画視聴による振り返りの効果について質問紙に回答した。その結果、かなり改善した・少し改善したと回答した学生は、内容・構成・スライドについては 80%を上回り、デリバリーについては 63.4%にとどまった。改善した要因については、どの項目も、クラスメイトの発表の視聴と動画での自身の発表を見ての振り返りが上位を占め、次いで教員からのアドバイス・フィードバックが 3 番目に多い要因であった。動画の振り返りについては 86.7%の学生が今後の発表の改善に役立つと回答しており、年間を通じた成長の成果として、よい発表とは自分中心の発表ではなく聞き手中心であること、テーマ選定や構成などに進歩を感じたなど、より本格的なプロジェクトを計画し遂行することができるようになったことが挙げられた。以上の結果から、教員は学生にまず自ら気づき学ぶ機会を提供し、自分では気づきにくい点について適宜アドバイスやフィードバックを行っていくことにより、表層的な発表の上手さからプロジェクトの本質に迫る成長が見込めることが示唆された。

Ref. No.	004
時間 / Time	16:05-16:30
会場 / Venue	A101

発表言語 / Language	日本語
発表者（所属） / Name(s)	井田 浩之（城西大）、松岡 弥生子（U of People）
発表タイトル / Title	大学生の抱くビジネスコミュニケーションへの初期概念：授業デザインへの示唆
発表概要 / Abstract	<p>【背景】 経済の国際化が進行する中、大学生がビジネスコミュニケーション系科目の開始時に抱く初期概念の解明と授業への反映は十分ではない。</p> <p>【目的】 英語ビジネスコミュニケーション履修者が授業開始時に抱く初期概念の性質を解明し、授業デザインに活用できる視点を得る。</p> <p>【方法】 経済学専攻の大学3、4年生18人に、2023年9月末、当該科目の開始時にGoogleフォームで初期概念を導く自由記述のアンケートを実施した。サンプル数も小さく、記述データの解釈精度を上げるため、コード化はせず現象学的認識に基づいて精読し分析した。</p> <p>【結果】 次の3つの傾向の記述が見られた。 1 外資系のイメージ：外資系に行くつもりは無いが、仕事で不自由が無い程度の知識を付けたい 2 海外との取引等で使う英語：将来は、英語を介して人を繋ぐ商社マンになりたい 3 言語の使用場面に関する記述：礼儀作法の英語を学びたい、外国の顧客に対応できる人になりたい</p> <p>【考察・結論】 学生は現在の生活との関係は薄いとしつつも、キャリアと関連した英語使用への漠然としたイメージを抱いている。このイメージは社会状況的に構築された可能性が高い。そのため、学習者の意味生成の過程は一般化できないとも言える。先行研究では、ビジネスコミュニケーションは、専門的なESPの言語使用が強調されているが、学生は一般英語コミュニケーション能力への期待を示しており、EAPやEGPも考慮した授業デザインの検討が必要であろう。</p>

Ref. No.	005
時間 / Time	16:05-16:30
会場 / Venue	A103

発表言語 / Language	日本語
発表者（所属） / Name(s)	橋崎 諒太郎（名古屋大院）、関山 博久（関西学院大学）
発表タイトル / Title	シャドーイングの最適な反復回数の探求：ボトムアップ処理能力とリスニング能力の向上および連語表現の記憶に焦点を当てて
発表概要 / Abstract	<p>聞いた音声を即座に声に出すシャドーイングは、第二言語の学習方法として活用されており、ボトムアップ処理能力の改善によるリスニング能力の向上や、連語表現の記憶に効果があると言われている。また、一般的に最適な反復回数は、5 回程度とされている。しかし、この反復回数がシャドーイングの効果の側面によって異なるかはこれまで明らかにされていない。以上の課題を解決するため、本研究では、日本語を母語とする大学生 30 名を対象に週 1 回（90 分）×11 回のシャドーイング活動を実施した。また、ボトムアップ処理能力を測定するための（1）ディクテーションテスト、（2）リスニングテスト、連語表現の記憶を測定するための（3）並び替えテストを指導前後で実施した。加えて、授業内外でのシャドーイング反復回数を記録した。結果、ディクテーションテストの点数は、反復回数に関わらず事前テストと事後テストの間で統計的に有意な改善が見られた。一方で、リスニングテストと並び替えテストは反復回数とテスト時期に交互作用が見られ、反復回数が多い学習者のほうが、事後テストでの点数が高くなる傾向にあった。以上から、ボトムアップ処理能力向上のためには、5 回以上の反復が必要ではないが、ボトムアップ処理能力を自動化させてリスニング能力を向上させたり、連語表現を記憶するためには、より多くの反復回数が必要である可能性が示唆された。</p>

Ref. No.	006
時間 / Time	16:05-16:30
会場 / Venue	A104

発表言語 / Language	English
発表者（所属） / Name(s)	KIMURA, Masami (Mukogawa Women's U)
発表タイトル / Title	A Study of Current Pronunciation Issues of Japanese English Learners: An Analysis of Questionnaire
発表概要 / Abstract	<p>This presentation will provide an overview of results obtained within my current Ph.D. programme, which will outline original findings from a questionnaire that explored the pronunciation difficulties Japanese students have when speaking English. It will provide a literary overview of why pronunciation issues are present with Japanese EFL learners, and explore ways in which to better teach pronunciation to Japanese learners at the classroom level.</p> <p>In consideration of issues that Japanese EFL learners face when learning English pronunciation, the following research questions were created to be explored:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) Which phonemes do Japanese learners of English find difficult to produce in an intelligible manner? 2) How do Japanese learners approach learning comprehensible pronunciation? <p>A total of 49 participants (n=49), who were first, second and third-year undergraduate students majoring in English took part in this study. All the participants were Japanese females between 18 and 22 years old with pre-intermediate/intermediate levels of proficiency in English which corresponds to B2/A2 for CEFR. The study examines the relevance of students' individual and social-related language background and connection to their learning environment. Examples of questions include previous travel history and overseas residency. In the open-ended questions, they give their opinions on English pronunciation.</p> <p>The results collected show trends in difficulties such as /æ/, /ɜ:/, /ʊə/ in vowels and /θ/, /ð/ in consonants, and that most of the target group had a rather strong desire to improve their speaking skills and acquire native-like pronunciation in order to communicate successfully.</p>

Ref. No.	007
時間 / Time	16:35-17:00
会場 / Venue	A101
発表言語 / Language	日本語
発表者（所属） / Name(s)	松岡 弥生子 (U of People)、井田 浩之 (城西大)

発表タイトル / Title	オンライン教育再考：日本人英語教師の授業モデルに対する潜在的ビリーフの研究
発表概要 / Abstract	日本の大学のオンライン教育は、パンデミック時には広く普及したが、その貴重な経験は十分に活用されたとは言い難い。だが、AI時代の到来により、教師のデジタルやオンライン授業への認識解明と精緻化が必要となっている。そこで本研究では、「オンライン授業の経験が、教師の抱く授業モデルにどの様に関わっているのか」を、日本の大学英語教師のビリーフ（教育や授業への信念）に焦点を当て、検討する。これまで、ビリーフの主な構築要因は、教師自身の経験、社会文化的環境、教師教育で得た教育哲学とされてきた。2022年末の質問票では、学習者ニーズへの適応、ICT教材との連携など、教師の様々なビリーフが見られた一方、オンラインや遠隔といった授業形態への言及は認められなかった。これを踏まえ、2023年に、前回の質問票回答者から4人にZoomフォローアップインタビューを行なった結果、大半の回答者が、無意識に、対面式授業を本来の授業形態と捉え、オンライン授業はその代替に過ぎず、高い教育効果を期待していない事がわかった。これは、教師のビリーフは無意識や潜在的な場合もあるという研究(Kagan, 1992, Borg, 2001 など)とも呼応する。教師は、オンライン授業をコロナ禍の社会的状況への対応として実施したものの、教師ビリーフの根底にある教育モデルは影響を受けなかったことが示唆された。

Ref. No.	008
時間 / Time	16:35-17:00
会場 / Venue	A103
発表言語 / Language	日本語
発表者（所属） / Name(s)	小口 一郎（大阪大）、三木 訓子（大阪大）、岡本 清美（大阪大）

発表タイトル / Title	「人間」へのシフト:5年間の大規模必修 e-learning 授業運営を通して
発表概要 / Abstract	<p>本発表では、大阪大学で2019年度から実施している大規模な英語 e-learning 授業を紹介し、授業運営を通して浮かび上がった課題、解決策として人間的関与の重要性に焦点を当てます。導入初年度は、LMS への不慣れや PC スキルの不足が学習障壁となり、学生の満足度は非常に低いものでした。翌 2020 年度には、コロナ禍により遠隔授業への全面シフトが起きましたが、動画配信やライブ授業が増える中、自律学習を求める本科目のアプローチとの間に顕著な差が生じました。PC スキルなど学生の自助努力だけに頼る教育手法の限界も浮き彫りになりました。これらの問題を解決するため、英語授業が全面的に対面に戻った 2023 年度からは、これまでの LMS やメールでの対応に加えて、授業運営者が対面も含めより直接的に学生をサポートする仕組みを導入しました。学生が対面や Zoom で質問ができる「オフィスアワー」や、本科目を履修した学部生 SA が、履修中に感じたことや学習の進め方などを後輩に伝える「後輩へのメッセージ」、1 人での学習が難しい学生に場を提供する「ブートキャンプ」などがその例です。教員・学生ともに顔の見えない e-learning 授業であっても、スクリーンの後ろに生身の教員と学生がいることを、相互に感じられる仕組みづくりこそが、3700 人もの大人数に必修 e-learning 授業を行うために最も大切なことであると考えます。</p>

Ref. No.	009
時間 / Time	16:35-17:00
会場 / Venue	A104
発表言語 / Language	English
発表者 (所属) / Name(s)	MOSKOWITZ, Nicole (Kwansei Gakuin U)

発表タイトル / Title	How do student created videos affect speaking anxiety?
発表概要 / Abstract	<p> Flip is a social language-learning platform that is used via a smartphone application or website. It is popular with teachers as they can assign speaking practice for homework and monitor student videos, modify topics, easily upload class information, and is free. Students can practice, personalize, and post videos which gives them the locus of control, and watch and reply to their classmates' videos. Using videos and technology in general as a medium of communication has been a method which helps promote willingness to communicate and decrease anxiety. If students cannot produce output, they will be unable to fully engage in language development and speaking anxiety can increase. Considering this, how does using Flip affect learners' foreign language speaking anxiety (FLSA)? What changes in FLSA levels occurred after 15 weeks? To investigate these questions, six EFL classes from a private Japanese university made five Flipgrid videos every 2-3 weeks over a 15-week semester. These videos were related to their textbook topics, with students being allowed to plan or not, depending on their preference. A questionnaire was created with selected questions from the Foreign Language Classroom Anxiety Scale (Horwitz, Horwitz, & Cope, 1986), and The Shortened Scale of Second Language Listening Anxiety (Kimura, 2017). The survey validity was analyzed Guttman's Lambda 2, 3, and 6 Coefficient (all larger than 0.9, indicating strong internal reliability) The selected questions focused on FLSA, was then translated into the students' L1, and given as pre- and post-tests to both groups; the aforementioned experimental group, n=147, and the control group (n=135) who completed their regular English conversation classes. Mann-Whitney results showed the control group reported significantly higher FLSA for 4 survey questions and one PCA of Self-Focused Apprehension. In this presentation, the research, results, limitations, and how speaking anxiety was affected by video creation will be discussed. </p>

作成・発行

JACET 関西支部 研究企画委員会 (2023 年度)

委員長	山中 司 (立命館大)
副委員長	蔦田 和美 (関西外国語短大)
副委員長	近藤 雪絵 (立命館大)
委員	荒木 瑞夫 (近畿大)
委員	デイヴィス 恵美 (大阪成蹊大)
委員	平野 亜也子 (京都産業大)
委員	松永 舞 (京都産業大)
委員	松岡 真由子 (関西学院大)
委員	宮永 正治 (近畿大)
委員	Musty, Nicholas (神戸学院大)
委員	延田 リサ (立命館大)
委員	Rudolph, Nathanael (近畿大)
委員	大賀 まゆみ (立命館大)
委員	西条 正樹 (びわこ成蹊スポーツ大)
委員	阪上 潤 (立命館大)
委員	坂本 南美 (同志社大)
委員	下村 冬彦 (立命館大)
委員	Smithers, Ryan (大谷大)
委員	豊田 順子 (関西外国語大)
委員	上田 眞理沙 (立命館大)